

日 時：2018年9月1日（土）～9月3日（月）

場 所：岡山県倉敷市真備町

参加人数：27名

## 1. 活動参加にあたって

これまでの私のボランティア活動経験と言えば、2011年の東日本大震災の時に、岩手県大船渡市に1回だけ行ったことがありました。夏頃でしたので、大震災から約半年が経っていましたが、港周辺は依然として「瓦礫の山」であったり、線路がゆがみ、鉄道もまだ開通してなかったりと、復旧にはまだまだ時間がかかるなあと感じたのを覚えています。その時は、被災された住宅の側溝掃除をお手伝いさせていただき、20人近くで掃除したものの、ドブに溜まった泥は水分を含み想像以上に重く、1日かけても2軒を終えるのがやっとでした。掃除の途中では、震度4の余震もあり、いつ起きるか分からない天災の恐ろしさも体感しました。

それから数年経ちましたが、今年7月の西日本豪雨で、特に今回お伺いした倉敷市真備地区は、短時間で完全に地区一帯が水没してしまった様子が、連日テレビや新聞等の報道で流れ、自然の脅威を改めて感じていました。時を同じくして、ある企業様から「ボランティア活動」を入れた社員旅行を計画したいとお話をいただいていた。「百聞は一見に如かず」自分で行って見るしかない！自分の目で実際に確かめて来よう！そんな気持ちで今回臨みました。

## 2. 活動日当日・活動内容について

1日目：9月2日（日）

新倉敷駅からシャトルバスに乗って10分後、ボランティアセンターに到着。ボランティアセンターには、各地から集結された団体や個人の方が大勢来られており、受付を済ませた後、1グループ5名1組に割り振りをされました。活動中の注意事項を聞いた後、私たちも5名1組に分かれてバスに乗車。さらに10分後、今度は被災された地区の近くにあるサテライト（活動拠点）に向かいました。途中、「窓や扉のない家」や「ブルーシートに覆われた堤防」など、浸水の爪痕が至る所で残っており、被災地がだんだんと近づいていることを感じました。サテライトでは、「被災された方からのボランティア要請」に対して、当日のマッチング確認が行われ、活動に必要なスコップやバール、一輪車やバケツ等の道具を一式借りて、依頼主のご自宅へ送迎していただきました。到着すると、ご夫婦で出迎えていただきました。ご自宅は、氾濫した小田川の堤防脇に位置し、被災時は5メートル以上浸水されたようで、すでに窓もなく、扉も、1階の床もなく、屋根はあるものの、骨組みだけとなっていました。私たちは、残った壁材や天井の解体、サッシや窓の運び出し、床下清掃等の作業を行いました。ところどころ釘が飛び出しており、床を掃くと粉塵が舞い、歩くのも難しい状況でした。不慣れな手つきの為、壁を少し壊していくのも、とても時間がかかりました。また気

温も30度を超え、熱中症も心配される為、20分作業をし、10分休憩のサイクルで行いました。計10人でお伺いしましたが、ちょっとずつしか作業が進まず、これをご家族だけで作業するのは、莫大な時間と労力がかかると感じました。ご夫婦におうかがいすると、「被災後、家の敷地内に瓦礫や家財道具のごみがいっぱいになったが、それを2回分運んでもらって、ようやく今の状況になった」と語ってくれました。また、道具置き場には、洗濯バサミにつるされた思い出の写真が干してあり、泥の付いたアルバムや水没したであろう一眼レフのカメラもおかれ、思い出の品が水に浸かってしまう現実を目の当たりにした瞬間でした。

昼食の休憩時、小田川の決壊部分を見に行くと、鉄の杭やブルーシートに覆われ一通りの工事は済んでいる様子でした。決壊場所を眺めていると、近所の被災された方がたまたま通りかかり、河川敷の様子を話していただきました。この河川敷は、もともとは木々が生い茂り、行政にもきれいにするように要請をあげていたそうです。しかし皮肉にも、今回豪雨により洪水が起きてしまい、災害が起きたことによってきれいになってしまったと、悔しさをにじませながら語っていただきました。マスコミでは報道されないような事実も知ることができました。

また、家の外に出したがれきや木片などを、軽トラックに載せ、近くの集積場に捨てに行く作業も行いました。集積場には木片の山、壁材の山、金属類の山など様々なごみと瓦礫が集められ山になっていました。中には、ぐにゃぐにゃになった自転車は何台も積まれていた状態でした。これを見ただけでもぞっとしました。



写真：ボランティアセンター内部  
大勢の方が来られていた



写真：サテライトでの作業準備  
道具を借りて各現場へ出発



写真：サテライトでのマッチング  
当日作業内容が割り振りされる

## 2日目：9月3日（月）

前日とは別の依頼主へお伺いしました。ご主人がお一人で迎えていただき、前日同様、家は窓も扉もないご自宅で、主に壁材を壊す作業をしました。昔ながらの住居で、壁を壊すと竹の骨組みに土壁、断熱材が入っており、竹の骨組みは格子状に組んでいる為、そう簡単には壊せず、非常に苦戦しました。休憩時、ご主人にお話を聞くと、「大雨当日は、奥様に促されて高台に避難し、難を逃れた」とのことでした。また、「ボランティアは毎日要請をしている」とのことでした。やはり家族だけでのできる作業量は限られてきます。このままりフォームをして利用するか、建て直すかは悩んでいる様子でした。時よりにこやかに話していただきましたが、内心とてもつらいだろうし、毎日作業に追われ、とても疲れていらっしやると感じました。



写真：ぐにゃぐにゃの自転車は何台も積まれた、金属瓦礫の山



写真：被災された堤防沿いの家々窓も扉もない状態の家が並ぶ



写真：決壊した堤防の修復場所  
金属の杭やブルーシートが

### 3. 今回の活動をつうじて

今回、被災した現場を自分の目で見ることで、肌で感じる事ができた貴重な経験となりました。まさに「百聞は一見に如かず」でした。災害直後は、報道もされ、新聞やニュースにも取り上げられますが、その現場には今もずっと実際に住んでいる人がいて、建物があり、生活を営んでいらっしゃる。私たちが行った活動は、ほんの一瞬で、限られた事しかできませんでしたが、被災された方へ少しでもお手伝いできたのではないかと感じています。参加した私自身も周辺の皆様へ活動の様子を伝え、発信し、少しでも被災された方へ思いをはせることが大事だと感じました。

また、全国から集まったJT Bの仲間とも交流・意見交換ができ、有意義な時間を過ごすことができました。このような機会に参加できたことに感謝致します。ありがとうございました。



写真：今回参加された皆様と集合写真